

校園名：大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

所在地：〒543-0054 大阪府大阪市天王寺区南河堀町 4-88 電話番号：06-6775-6047

記載日：平成 28 年 5 月 16 日 記載者：井上広文 記載者役職：副校長

本校の校風、特色について：

本校は創立以来、生徒の**自主性と自立**を重視し、**自由**の意味を理解するとともに自由な精神を発揮できる人間を育てる校風を保っている。様々な素質を持つ生徒の集団が、各生徒の**個性**を伸ばすにふさわしい環境を作っている。

本校では、**本物に触れる経験**を通じて真理とものの価値を知ることと、互いの個性を尊重し、**議論を通して学ぶ**なかで科学的なものの見方・考え方を身につけ、さらに**現代の課題を解決**していく行動力を身につけることを重視した指導方針に基づいて、日々の教育実践が進められている。

本校は、**生徒自治会**を基盤とした活動を通じて、生徒自身が責任を持って企画立案、実行する経験を積み重ねさせることで、様々な分野で**社会を支える自覚的なリーダー**を育成することを目指している。成功体験だけでなく、失敗もよい機会ととらえて課題をより明確化させ、困難な状況からでも問題解決できる力を育てるよう配慮している。

教員にとって本校は、時代が変化しても通用する**教育の本質**を、日々の教育活動の中で身をもって感じ取り、自らの教育実践への自信と意欲を育てることのできる場である。あるべき教育の姿を追求するという目標を掲げて研究、研鑽できる学校である。

卒業生の多くは本校を、自分の**人生の柱**になる部分を形成した場であると感じている。卒業してより広い人間関係を作ったとき、いかに母校が特別な場所であったかを再認識し、それが貴重なものであったと再評価している。行事のたびに母校を訪問する卒業生が数多くいることも、本校の特徴のひとつである。

本校は創立以来、校舎を共有する附属天王寺中学校と密接な連携を保っている。現在一般的となった**中高一貫校**や中等教育学校も、本校と附属天王寺中学校との中高一貫の形がモデルになっている部分が多い。本校では併設型と中等教育学校の中間的な形をとりながら、**天王寺式の教育課題設定と教育方法**を中高で共有し、一貫教育における利点と解決すべき課題を明確化してきた長い歴史がある。この経験が活かせることも本校の特徴となっている。

本校の卒業生の活躍状況について

①追跡調査をしているかどうか、その方法

系統的な調査は実施していない。

②どの程度把握できているか、その情報はどこが持っているか

同窓会の各期幹事が住所等を把握する際、あるいは同窓会報の郵送時に送付する住所・勤務先等の確認はがきが返送された際の記述により現状を把握する。記述のある同窓生についての情報を同窓会が集約し、名簿編纂により学校も情報共有する。

③具体的な状況

本校卒業生の中の著名人としては次のような例がある。（一部は附属天王寺中学校卒業生）

山中伸弥（京都大学教授・ノーベル賞）、寺田逸郎（最高裁判所長官）、世耕弘成（内閣官房副長官）、辰巳琢郎（俳優）、住野公一（オートバックスセブン創業者）、辻原登（芥川賞受賞作家）

その他、多数の学者、政治家、財界人、文化人、芸能人等を輩出している。

本校勤務経験者の教員が公立学校・教育委員会などへ戻った後の活躍状況について：

①追跡調査をしているか、その方法

系統的な調査は実施していない。

②どの程度把握できているか、その情報はどこが持っているか

毎年開催する教育研究会の案内を郵送する際、研究会への参加申込書に現職が記載されている場合把握できる。特に集約はしていない。

③具体的な状況

この10年間に限れば、大阪府立高校との交流人事の教員が府へ復帰した数は7人であるが、それ以前も含めると、本校退職後に私立校や大学教員に採用される例が比較的多かった。交流人事の復帰者では、管理職等への就任という面ではなく、主に教科教育分野で大阪府の研究会や社会貢献をリードする活躍、若手教員を育成する取り組みの中心となる活躍が多く見られる。また、この10年間に数多くの任期付教員が着任しているが、そのうち9人が大阪府等の教員採用試験に合格し、教諭として採用されている。本校の多忙な職務と並行して採用試験の準備をすることは大変であるが、本校での勤務を通じて力量を高めており、新しい赴任先でも高い評価を受けている。

魅力のある、特色のある、または今後公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

本校は様々な教育課題について、実践的かつ効果的な取り組みを続けており、その中には非常に長期にわたり継続しているものが多い。これは本校の特色と関係する部分も多いが、よき人格、人材を育てるに適切な取り組みが工夫され、その教育的意義を教員全体が共有しながら進めていることの表れであると考えている。分野ごとにいくつかまとめて実例を紹介する。

1. 本校の特色となっている、生徒の自主性、主体性を引き出すための取り組みとして、主に自治会活動を中心とした生徒活動や行事があるが、これらは多くの学校で取り入れてもらいたい要素を含んでいる。

高I合宿訓練：入学直後の5月初旬に実施。3泊4日で延べ12時間以上のグループ討論を中心に構成し、HRや学年企画を含む。**コミュニケーション**の重要性に気付かせるとともに、**高校生としての自覚**を育てることに効果を上げている。高校生活3年間の方向性を示す点でも重要な位置づけがされている。

自治会行事：現在、附高祭(文化祭)、音楽祭、長距離徒歩の3つが行われている。年間行事予定にあらかじめ組み入れることはせず、生徒が自発的に行事実施の目的や意義から議論して実施案を作り上げることを求め、主体的に実施運営させる。集団での活動に必要な多様な力を、総合的に身につけさせるための手段となっている。

2. 本校の学校行事は、学校理念にもある「**本物に触れる中での成長**」のための手段を具体化したものである。普遍的な部分は継続し、役目を果たしたものは新しい形に改変して実施する。

研究体験旅行：他校に先駆け、修学旅行をグループによる総合的な学習および課題研究の場として活用した。毎年同じ場所を訪問先とすることで、現地との協力関係が密接である。この形態も世間で一般化したので、多様な体験活動を中心にすえた新しい宿泊行事に移行中である。

地学実習：貝塚市蕎原をフィールドとして2年生で実施。全生徒を10～15人程度の班に分け、本校理科教員全員が各班を担当して現地での説明を行う。実際の地質構造に触れ、調査結果は報告書として提出させる。地学を専門としない教員にとって、地質分野の研修ともなる。

体育大会・スキー合宿：体育大会は一般的な運動会ではなく、本格的な陸上競技場を使用しての記録会。スキー合宿は本校教員が技術指導・宿舍生活指導のすべてを行う。

3. 本校は現在SSHに指定されているが、そのプログラムの多くは以前から実施してきた教育活動を基礎として構成されている。本校の教育方針とも共通する、「**議論と体験を通じた科学的思考力・判断力**と課題解決能力の育成」をテーマとして開発研究を進めている。これと共通する理念のもとで、様々な教科指導プログラムが組まれている。

プルーフⅡ（課題研究応用）：グループによる課題研究であるが、2年生1人・1年生2人から成るユニットを基本として活動する。学年によってユニット内での立場や役割を変えることで、研究方法だけでなく**組織マネジメント能力**の育成も図る。研究テーマは2年生が自ら考え1年生に提示し、メンバーを募集する。すべての班が研究発表を行い、研究報告書を作成する。

科学英語：研究発表・質疑応答を英語で行えるようになることを目指す。プルーフⅡでの自分の研究を材料として実習し、国際交流プログラムでの発表会にも対応する。

生命論：生命をテーマとして現代的な問題や身近な問題を取り上げ、多くの外部講師の講義、実習と**グループ討論**を通じて、**科学と社会の関連**を意識して活動できる人間の育成を図っている。さらに**リスクマネジメント**の視点も身につけさせる。

環境論：フィールドワークと外部講師を含めた議論を通じて、**自然と人間のかかわり**を意識できる科学的人材育成を目指している。ここでも**リスクマネジメント**の視点を重視する。

スーパーサタデー：**土曜日の有効活用**として、普段の授業では扱えない特色のある内容の講座や、大学入試を念頭に置いた特別補習を行っている。対象者を希望者のみとすることで、学習の深化を図ることができる。

宿泊研修：SSHに指定されて以来、夏季を中心に「KEK及びつくば研究施設」「SPring8及び西はりま天文台」の2つの**宿泊研修**を実施している。先端の科学や研究者に出会うことで、**日常の学習の重要性**を再認識させるとともに、進路意識の向上を図っている。

国際交流：米国の理数科高校と提携した「サイエンスアドベンチャー」、タイの理数科高校と提携した「アジア・スタディー」の2つの**国際交流プログラム**を実施している。研究発表、文化交流等を総合的に含むプログラムである。

4. 本校は**PTA活動**等、保護者と密接な協力関係を保ちながら教育活動を進めている。PTAの各種委員会活動等を通じて、保護者に学校の**教育方針に関する理解**を深めてもらうことが、学校が実施するプログラムへの多様な**支援**を得ることにつながっている。具体的には次のような取り組みがある。

- ・PTA役員以外に毎年各クラス9人程度の保護者にPTA委員会委員を委嘱し、**分科委員会**や行事を通じて保護者－学校間のつながりを強める。

- ・附高祭(文化祭)にPTAの企画の場所を確保し、多くの保護者に参加してもらう。

- ・毎年数回の**保護者向け講座**（公開授業）を実施し、生徒の受講する授業を体験してもらう。なお、以上のような取組に対して平成27年度、文部科学大臣より**優良PTA表彰**を受けた。

5. 本校は様々な分野に**豊富な人材**を輩出していることが特徴のひとつに挙げられる。このことを活用して、次のような取り組みを行っている。

- ・現役生徒や保護者に対する**講演会**を定期的実施している。特に保護者に対する講演会は、本校の特徴や良さについて具体例から理解してもらう機会ともなっている。

- ・環境論等のプログラム実施にあたって、過去にそのプログラムを受講した卒業生に、フィールドワークやグループ討論における**アシスタント**を依頼している。意義と内容をよく理解した卒業生の参加、生徒への働きかけが、プログラムの効果を高めることにつながっている。

・進路指導において、様々な分野に進んだ最近の卒業生に講話を依頼している。在校時の活動を充実させることがいかに将来につながるかということの身近な実例を知ることが、進路意識を高めることにつながっている。

地域において、現在、本校はどのような存在であると考えるか：

本校は高等学校であり、校舎が存在する地域に特化した役割よりも、大阪府等、より**広域の教育活動**に対して影響を与える存在であると考えている。

本校で勤務することになった、人事交流教員を中心とする新任教員は、本校の教育方針に触れる中で、**教育のあり方**そのものを深いレベルで考える機会を持つとともに、高度に**自立した教員**として育てている。これらの教員が大阪府に戻ることは、**地域の教育を支える核**を多数送り出すことを意味する。このことは地域の教育全体に、**持続的な効果**を及ぼしている。

同様に、本校が受け入れる多数の教育実習生も、単なる授業実習や校務体験という水準を超えて教育の本質について考え、実践する経験をしたうえで教育現場に出て行くことになる。本校での実習により、長い**教員生活の基盤**が育てている。

このように本校は、地域の将来に対して、教育人材育成を通じて貢献する存在であるといえる。また現在、大阪教育大学には連合教職大学院が設置されており、現職の教員が本校をフィールドとした実践研究を進める場としての活用の機会も広がっている。

附属学校の存在意義、本校の存在意義について：

附属学校は研究、教育実践、教員養成などにおける社会的責務を負うとともに、社会的に有用な人材を育てるという点でも社会に対して貢献する責任を負っている。その際、新しい教育実践を通して獲得する成果も当然必要であるが、教育に普遍的な価値を見出し、それを守ることができる場としても、附属学校が存在する意義は大きい。教育は短期間で成果が出たり、簡単に普遍化できたりするような性格のものではない。むしろ、一定以上の期間にわたる安定した環境があって初めて、国の将来にまでかかわるような成果が表れる可能性が生まれる。

今まで附属学校が送り出してきた人材や、附属学校での実践研究成果が広く普及してきた歴史により、附属学校が有用な役割を果たしてきた事実は明らかである。

附属高等学校は、いわゆる大学進学に重点を置いた学校と同一視される傾向があるが、その校風と学校のあり方は大きく異なる。現在、学校の教育活動は、総合的なバランスのとれた人間育成よりも、目的を絞り込み、目標へ効率的に到達することがより評価される傾向にある。附属高校も社会の要請に応えるために、運営体制を見直し変化させてきた。しかし一方で、力強く生きる力を持ち、社会に貢献できる人間を育てる教育のためには、学校が多様性を維持していなければならない。それには生徒の多様な個性とその発揮が尊重されることと、教員の多様なかつ自発的な教育実践が許されることの両方が必要である。多くの附属高校ではそれらが高い水準で保たれており、これを維持することが教育の実践、研究のために不可欠である。同時に、これらの特性は一旦失われると回復が困難であることは、伝統的な技術・技能等の伝承が途絶えると新しい技術開発のみでは回復できないという、様々な分野で見られる現象と同様である。特に、教育という未来を支える人間を育てる営みには失敗は許されない。附属学校には過去の様々な成果の蓄積という財産があり、これは国民全体のものである。附属学校を維持して行くことは、国の将来全体を保障する意味でも重要である。

本校は多数ある附属高等学校の中においても特に、上述の意義に沿った役割を果たしてきた。本校は生徒の自主性を基盤とした伝統的な教育活動を守る一方で、現代的な課題の研究にも積極的に取り組んでおり、本校が存在することによって、あるべき教育の形が具体的に見える形で示されることになると考えている。

